



八千代市郷土歴史研究会
 会長 村田一男
 事務局 八千代市勝田台 3-24-10 牧野方

謹賀新年

本年もよろしくお祈りします

1月6日(日)

日本橋七福神巡り

新年を寿ぎ、あわせて日本橋～両国界隈の史跡探訪を楽しみます。

お知らせ

2月17日(日) 午後1時～4時

学習会(古文書解読その他)

◇ 市郷土博物館にて

3月17日(日)

船橋市飛ノ台史跡公園博物館見学会

- ◇ 京成海神駅改札口：12時50分集合
(勝田台12時16分発普通上り乗車のこと)
- ◇ または博物館入り口に午後1時10分
- ◇ 団体料金70円にて一緒に入場します
- ◇ 館長さんにご案内いただく予定

飛ノ台貝塚は約7千年前の縄文時代早期の遺跡。海と山の両方の幸に恵まれた環境に立地、周辺の遺跡に先駆けて定住生活を始めていたことが発掘調査で確かめられた。

住居跡25軒、炉穴およそ400基、貝塚約40ヶ所のほか平成5年には合葬人骨が発見されている。

この貴重な遺跡の保存のため平成12年11月、屋外展示施設として「史跡公園」と、飛ノ台貝塚や市内の縄文遺跡から出土した遺物等の展示をする縄文専門の「博物館」がオープンした。

4月7日(日)

14年度定期総会

? 午前9時半：千葉市生涯学習センター

(勝田台8時34分発急行上り乗車のこと)

? 午後から千葉市街の史跡見学会を予定

文化祭郷土史展盛況に開催

13年度の市民文化祭郷土史展は、新しいころみとして地域研究「上高野」を取り上げ、ムラのひとびとが築いてこられた歴史・民俗・文化を多くの市民・関係者に見ていただきました。

特に調査でお世話になった上高野の旧家の方々、上高野原に転入されて来た方々の関心も高く、会員の展示説明にも熱心に耳を傾けていただきました。

終了後、展示物に関して、三省碑については山崎家に、板碑については市博物館、その他は金乗院に寄贈し、地域で有効に活用していただくこととしました。

なお当日、併せて「ふるさと再発見 八千代の道しるべ」の最終市民配付を行ない、このためもあって大勢の方のご来場がありました。

また、新会員にも執筆でご活躍いただいた「史談八千代26号」も発刊・発売され、ご来場の方々に購入いただきました。



参加者数(記名者のみ)

10月27日(土)午後：お客様97人・会員26人

22日(日)全日：お客様67人・会員20人



11月11日(日)

バス見学会の報告

金山城址・大光院を訪ねて
板谷 繁

前日の風雨も忘れ、当日はさわやかな快晴に恵まれて、会員以外の方5名の参加もあり、全員18名が一路太田へと出発しました。

北千葉ICから入り幕張PA羽生PAに休憩しながら佐野ICを予定通り到着。

バスを進めるうちに予定には入っていない「道しるべ」に寄ることに。

(1) 追分けの道しるべ・石地藏
(大田市指定重要文化財)

この道しるべは日光例幣使道と古河道との分岐点新島の追分にある。

道しるべの左側には追分け地藏と呼ばれる地藏菩薩があり、今でも子供を庇護する地藏として厚い信仰の対象となっている。

(2) 女体山古墳(国指定史跡)

墳丘の全長106m帆立貝形古墳としては奈良県の乙女山古墳(墳丘全長128.6m)に次いで全国第2位の規模を有する。

(3) 天神山古墳(史跡)

東日本最大の規模を誇る墳丘全長128.6mの前方後円墳である。周囲には二重の堀が巡らされていた。

(4) 大光院

(通称子育て呑龍様・浄土宗)

正しくは義重山新田寺大光院といい、新田氏の祖である新田義重をまつお寺。

新田氏を先祖とする徳川家康が追善供養のため建立したもので開山は芝増上寺より招かれた呑龍上人だ。

上人は寺領をさいて捨てて子や貧しい子供たちの養育努めたため人々から慕われた。子育てを願って詣でる人が多い。



昼食を金山々麓の和風庭園「そば処 六助」で摂る。

(5) 金山城跡(史跡)

難攻不落といわれた山城・金山城山には石垣や井戸跡もあり、石垣で造られた貯水池などの遺構が残る。

山頂の本丸跡には新田義貞を祭る新田神社が建っている。



(6) 金龍寺(曹洞宗)

金山城主由良氏の菩提寺として建立されたもの。境内には石造物の七福神が並んでいる。

(7) さざえ堂

(曹洞宗祥壽山曹源寺)

新田一族の祈願所。ラセン形の回廊沿いに100体の観音が安置され、札所巡りがこの一寺にしてすまされるというわけである。

最後に今井酒造店に寄り群馬の地酒でチョップリ喉を潤し帰途となりました。



「八千代の道しるべ」
調査委員会発足について

当会が刊行した「八千代の道しるべ」を、市民等利用者が常に正確な資料として活用できるように改訂、増補を実施できる体制として調査委員会を設けることになり、10月28日の打合わせ会にて下記のとおり委員及び担当地区を決定し、各班それぞれ担当地区の現状確認を開始しました。

1班

地区：大和田新田・大和田・高津・八千代台・習志野市)
担当委員：佐久間弘文・酒井正男・恵志あや・清水正子

2班

地区：村上・千葉市・佐倉市・酒々井町
担当委員：畠山隆・板谷繁・天野和邦

3班

地区：上高野・保品・神野・米本
担当委員：園田充一・藤由美・大久保文夫・天野和邦

4班

地区：小池・島田・吉橋・麦丸・印西市
担当委員：福田和雄・中島和子・畠山カヨ子・伊藤安子
◇ 委員長：小菅俊雄

新発見があれば随時、その他訂正などは、まとまった時点で「郷土史研通信」に掲載します。

年度別の記録は「史談八千代」に発表します。

地区担当の区域は八千代市域の道標所在見取図を参照してください。(小菅俊雄)



10.27 文化祭楽屋での作業風景
(「史談八千代」26号の訂正に汗を流した)

12月9日(日)
まずは千葉市内から
第2班活動開始！
畠山 隆

当日は好天ながら冷たい北風の吹く日でしたが、委員長の小菅さんにも参加いただいて、わが班の板谷、天野、私(いずれもフレッシュコンビ?)と4人のメンバーで、午後1時過ぎ勝田台を起点に勇んで出発しました。この日は千葉市内の道標15基を点検する作業です。

最初に向かったのは勝田川の馬橋近くにある横戸の石塔群(チ11~15)です。1基ずつたねんに「みちしるべ」の道標調査票と照らし合わせながら作業を進めました。

早速天野さんから馬頭観世音の左右の銘が入れ違っているとの指摘があり、また脱字も見つかりました。このような細かい脱字や変体かなの読みなどは、多くの眼で確かめることによって効果が顕われると思われます。それにしてもこの石塔群はその存立の危うさを感じないわけにはいきません。周囲は残土とごみの山、今や石仏を管理する人もなく、残土とともにそのうち撤去されてしまうのか、今後が覚束ない状況で心配になります。

以下道標番号とはほぼ逆順に国道16号線近くの石塔群(チ07~10)、大杉神社社殿裏の庚申塔(チ05~06)、柏井市民の森近くの庚申塔・馬頭観音(チ01、03~04)と見て回りました。

調査票に載っている文字のいくつかは土中に埋もれて見えないうちもありましたが、土を除けてみると少しずつ浮き出てきます。初めに調査した方々の苦労がしのばれました。

こうして一番最後に点検したのが鷹の台カントリー近くの大和田街道に立つ庚申塔(チ02)でした。渋滞する車道の横で木漏れ日に三猿像が輝いていました。

全体としては、左右銘文の入れ違いの他に、脱字や文字相違など数個の訂正箇所を見つけました。

残りの地区を終了した段階で後日まとめて報告いたします。

今回は、板谷さんがあらかじめ下見をされたうえ、2千分の1の地図を用意されるなど準備の良さもあって円滑にコースを回り、3時すぎには作業を終わって帰途はコーヒー1杯の反省会をした後、日暮れ前に解散いたしました。

12月16日(日)
下高野で新しい道標を発見
園田充一

参加者：天野・小菅・関和・畠山隆・藤・園田

当日既存の道標調査を藤さんと予定していたが、新しく入会された天野さんからの連絡で「八千代の道しるべ」に記載のない道標があるが、判読できない部分があるとのことで、拓本を関和さんに依頼して2台の車で現場に向かった。

指摘された現場は、驚いたことに私が記した「もうひとつのさくら道」の二十三夜月光尊(チ03)の傍にあった道祖神の石祠の両面に道標銘があるではないか。

早速拓本を採り、左面「左/米本/舟橋/道/村助」右面「右/ほしな/木/道」正面に安永二年八月の造立年月日が確認された。

言い訳になるが、「チ03」を調査した際この道祖神の存在に気付いていたが、半分埋もれた状態であり、道祖神の石祠に道標銘が八千代市域で確認されていなかったこともあり、先入観にとらわれ注意を払わなかったことを反省しています。



その後当初の目的である下高野地区の道標の確認を行なったが、天野さんが「近くに発表されていない道標がある」とのことで、ゲートボール場から下高野へ下る旧道を行くと、旧道沿いに新しくできた駐車場のフェンスの傍に庚申塔が立て掛けられていた。



正面に「西米本いなり道」右面に「此方米本城橋道」裏面に「東青菅臼井道」とあり、大正九年の造立であった。これも新発見の道標として記録する。

路傍に放置された状態であるが、できればこの先にある庚申塔群に加えてもらいたいと思う。

この米本稲荷道の道標発見により予定を変更して、米本稲荷までの道筋にある道標をチェックして行くことにした。E08、E09やG01~04を確認し、米本稲荷に到着。ここで本日の作業を終え、散会した。

2基の新しい道標の確認は、天候にも恵まれ充実した一日でした。この道標を見つけた天野さん、拓本の関和さん、その他調査に協力していただいた皆さんご苦労様でした。

なお、私が興味を持っている「石工鷺沼村廣瀬音五郎」が米本稲荷の鳥居のほかに、本殿の台座にも認められたことも収穫でした。

新会員紹介

天野和邦

(佐倉市上座に在住)
左写真後列右側

「房総の郷土史」第29号(2001年・千葉県郷土史研究連絡協議会編)に本会の『八千代の道しるべ』刊行事業について、同協議会事務局長の樋口誠太郎先生ご執筆の記事が掲載されましたのでご紹介します。

「房総の郷土史」第29号掲載
ふるさと再発見『八千代の道しるべ』から
文・樋口誠太郎氏

八千代市では平成十二年度市民企画提案事業として平成十三年三月に、八千代市郷土歴史研究会が中心となりふるさと再発見『八千代の道しるべ』を刊行された。本会は会長村田一男氏と共にいろいろめざましい活動をされ、会の機関紙として『史談・八千代』の発行も継続されている。

本書を見ると私たち郷土史研究をすすめる者にとって^{かつもく}刮目に値すべき点が二つあると思う。

その第一は郷土史研究というと、いつまでもその土地の先人の手がけた業績にこだわっていて、そのほんの一部分を手なおしたようなものを全部自分がやったようにするというイメージがあることで、それが多いために若手の研究者の中には郷土史研究という表現より地方史研究を好むという風潮を生み出しているように私は考える。この『八千代の道しるべ』を見ると、郷土史研究にも実作業を伴った現地調査とその集約が大切であることを教えられる。この背景には多くの会員の方がボランティアで協力されたと思うが、郷土史研究も新しい時代がやってくることを考えさせられた。

第二はふるさと八千代「市民企画提案事業」という名称である。教育や文化面の予算は地方でも国でも財政的に苦しくなると真先に削減の対象となり、次第に活動も低調化する。現時点が正にこれに当たると思われる。それを陰で政治が悪い、役所が悪い、といっても仕方のないことで、むしろ八千代の市民企画提案事業という文化事業推進の方策はぜひ各地で検討して参考にすべきことではないかと思う。

12月23日(日)
横戸・勝田の古道と碑を訪ねて
わらび ゆみ

穏やかな冬晴れの中、20名が参加し、横戸・勝田のフィールドワークを行なった。

まず、9時発のバスで勝田台から、上横戸へ。16号線の脇にひっそりとある明星寺を訪ねる。銀杏の葉を敷き詰めたような境内、冬至の低い日差しをうけて、子安観音が静かに並んでいた。



古道をたどって、上横戸分れ道の石塔群で「よなもとをゝもり道」銘の庚申塔など4基の道標を見る。

下横戸の墓地内、天保の印旛沼掘削工事で亡くなった庄内藩人足の墓碑を訪ねた。横戸の人々は、異郷の地に眠る「御手伝人夫」仁兵衛さんの供養を今も続けているのだ。

16号線を渡る。下横戸のムラは、この国道に大きく分断されている。

下横戸公会堂には、大師堂そしてここにも子安観音が並んでいた。

文化5年銘の手洗石には、23人の十九夜講の寄進者がずらっと記されているが、「いち」「とめ」など全てひらがな2文字の女性たちの名前には興味深いものがあった。

勝田川にかかる馬橋手前の三叉路にも道標群がある。



川を渡ると、八千代市。勝田の入り口には庚申塔が3基、しっかりと道の守りを固めていた。

「勝田市民の森」に眠る仲山古

墳から勝田川沿いの低地を望み、会長の古墳の立地や景観についてお話いただく。

又兵衛割三叉路の道標の指す道をたどり、成田街道下市場の八坂神社の道標で小さな旅は終わった。

近くのホテルのレストランで昼食を兼ねた恒例の忘年会を開く。「八千代の道しるべ」発刊など「激動の2001年」はかくして暮れなんとしていた。

道案内の佐久間・牧野さん、忘年会幹事の関和さん、そして会員の皆さん今年もありがとう。

新発見道標報告
「八千代の道しるべ」調査委員会

本年3月「八千代の道しるべ」発刊の後、発見された道標7基を報告いたします。

なおうち、E17、E18、F05、サ15、シ01の5基は「史談八千代」26号に記載されています。(シ=酒々井町)

その後新たに、12月16日の調査によって2基が新発見として確認されました。

1. E19
・下高野ゲートボール場前四叉路 東南駐車場塀際路傍 金網の塀にたてかけてある。
・種類 - 庚申塔
・像容 - 文字碑
・形状 - 駒型
・確認者：園田・蕨・畠山・天野・小菅
2. サ16
・佐倉市先崎十字路 サ03の隣
・種類 - 道祖神
・像容 - 文字碑
・形状 - 石祠
・道標銘のある珍しい石祠
・確認者：園田・蕨・畠山・天野・小菅・関和

編集後記
印刷担当の増田さんに年内26日までに
入稿するため、あわただしい年の暮れの
深夜、パソコンを叩いています。
2002年はどんな年になるのでしょうか。
By. ゆみ